赤谷森林ふれあい推進センター所長が語る

所長　上野文紀

１．はじめに

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった…」という書き出しで有名な川端康成の小説「雪国」。主人公が汽車に乗り、上越国境に位置する谷川岳の麓を通過する清水トンネルを抜けた時に目にした情景として、有名な一節です。この長いトンネルに入る前、主人公も通過したであろう「群馬県みなかみ町」に位置する国有林が、本日の作品の舞台です。

川端の小説には描かれなかった群馬県北部のエリアにおいて、当センターが現在取り組んでいる事業内容をご紹介したいと思います。しばしの間、お付き合いください。

水上までは汽車も走ります

利根沼田森林管理署の全景

２．センターの紹介

赤谷森林ふれあい推進センターは、群馬県沼田市にある利根沼田森林管理署の庁舎内に事務所を構えます。事務所の所在地は沼田市ですが、主な活動は、みなかみ町北部に位置する相俣地区の国有林を舞台としています。

３．赤谷プロジェクトの歴史と目的

1985 年、関越自動車道に関越トンネルが開通するまでは、新潟県と群馬県との交通・物流の要は国道 17 号線・三国峠（三国トンネル）でした。関東と越後を結ぶ交通路として古くから利用されてきた三国街道は、上杉謙信の関東遠征にも利用された場所であり、現在でも当時の面影を偲(しの)ばせる遊歩道や史跡が残っています。また、先述の川端康成のほか、歌人の与謝野晶子、詩人の若山牧水などの著名人もこの峠を歩いたと言われており、江戸時代から近代に至るまでの様々な歴史・文化に思いを馳(は)せることができる場所です。その他、三国街道沿いでは、春は色とりどりに咲き誇る高山植物が出迎え、初夏はブナ林やコナラ林にそよぐ風を体感し、晩秋には紅色や黄色に彩られたカエデ類の紅葉も楽しめることから、多くのハイカーが訪れ、賑(にぎ)わいを見せます。

県境に鎮座する三国権現と三国山

三国街道の紅葉

この三国峠から、群馬県側を見下ろす形に広がる約１万ヘクタールの国有林（通称：赤谷の森）を舞台にして、2003 年 11 月「赤谷プロジェクト」の取組はスタートしました。自然豊かな赤谷の森において、赤谷プロジェクトが目指すものとして次の２点を掲げ、様々な活動に取り組んでいます。

①生物多様性の復元

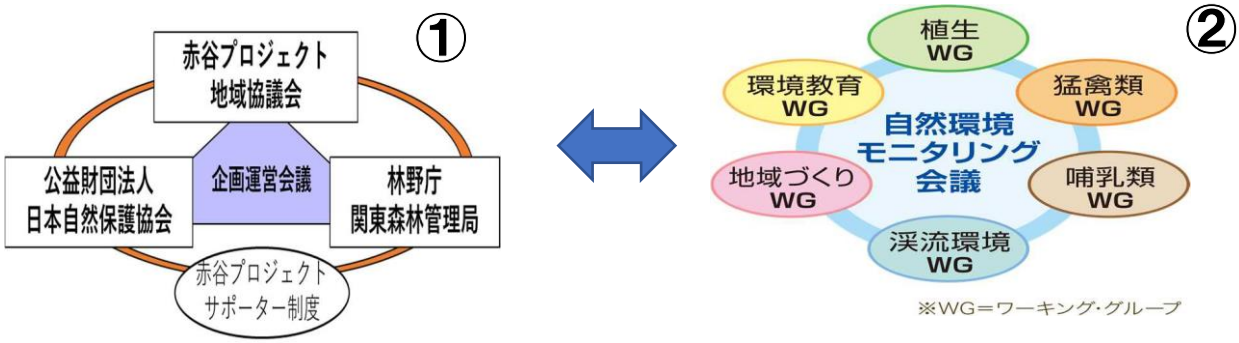
この地域の地形や地質、気候に応じて生息・生育している様々な動植物による森林生態系の保全や復元を目指します。

②持続的な地域づくり

自然環境の保全・復元の取組は、地域社会との関係の上に成り立っています。森の豊かさの向上に伴う様々な恵みを活用して、持続的な地域づくりを進めることを目指します。

三国山から見た赤谷の森

実施に当たっては、官民協働での管理・運営を行っており、地域住民で組織する赤谷プロジェクト地域協議会、公益財団法人日本自然保護協会、関東森林管理局の三者により運営しています。また、三者のみでなく、地元のみなかみ町や、当プロジェクトの理念に共感しプロジェクトの推進に協力して下さっているサポーターの皆さんのご支援の下、様々な活動を展開しています。（図①）



さらに、生物多様性に係る課題を解決するため、科学的根拠に基づく管理を行っています。「自然環境モニタリング会議」を中心に、個別課題ごとに専門家・実務担当者によるワーキンググループを設置し、上記①の関係者とともにモニタリングなどの活動を実施していく体制を確立しています。（図②）

ここからは赤谷の森で取り組んでいる各種事例を目的に照らしてご紹介していきます。

〇多様な植物で構成される森を目指して

生物多様性の観点から、赤谷の森にある約 3,000ha の人工林のうち、約 2,000ha を自然林に復元することを目標に掲げており、人工林を部分的に伐採し、広葉樹などの侵入を促す取り組みにより、本来の多様な樹種からなる森林に誘導していく試みに取り組んでいます。

また、モデルとなる森林の姿を明らかとするため、定期的な植生モニタリング調査も併せて行っています。

スギ人工林の伐採直後
（2011 年）

伐採後 11 年が経過した自然林
（2022 年）

〇動物たちの暮らす森を目指して

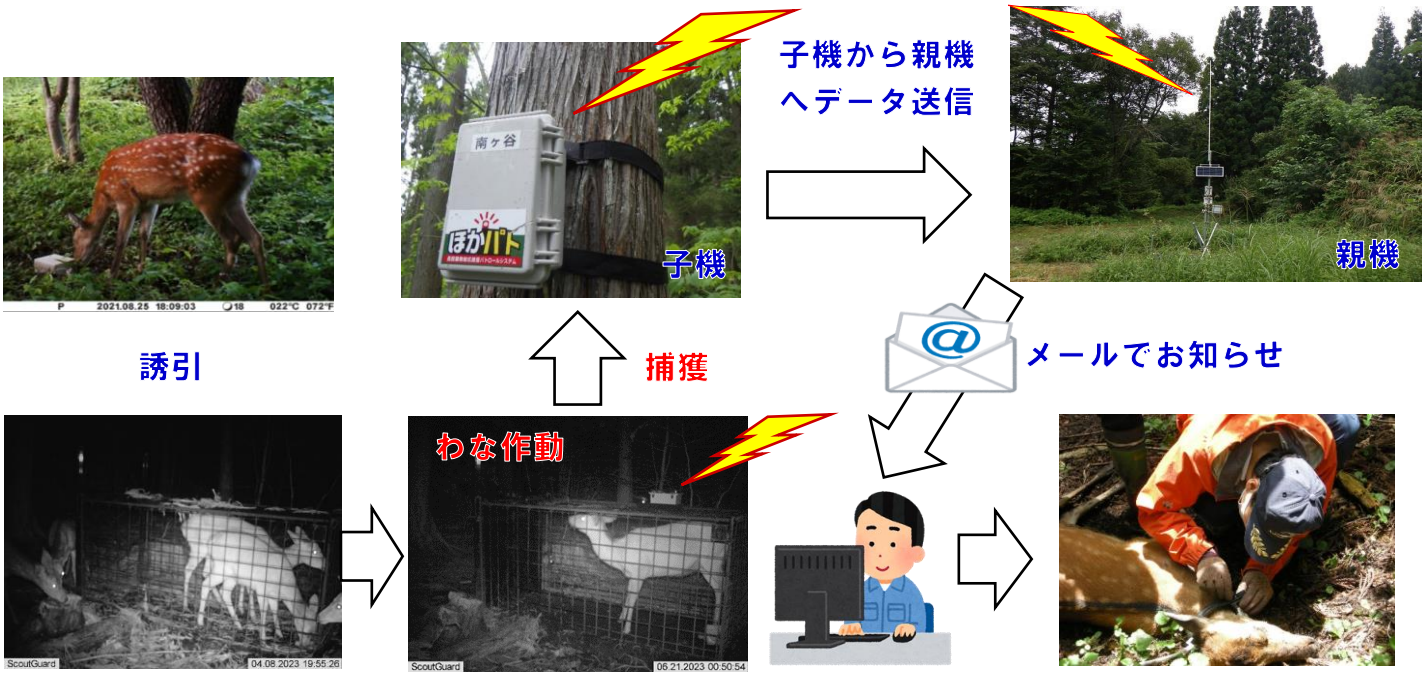
当プロジェクトでは、多様な動物が健全な状態で生息する森林を目指した取組を進めています。その一環として、ほ乳類を指標として、人工林から自然林への回復状況を評価する手法を検討するとともに、人と動物とのあつれきの解消に向けて、地域の関係者との情報共有・連携を行っています。これまでにセンサーカメラを５１地点に設置した結果、本州に生息するほ乳類の大半といえる４３種類の生息を確認しており、赤谷の森は、ほ乳類の生息環境として良好な状態が保たれていると考えています。

なお、赤谷の森の近隣地域では、現在、ニホンジカの生息範囲の拡大が顕著となっており、これまで低密度と言われていた赤谷の森でも、その姿が目撃される頻度が高くなっています。

このため、ニホンジカの行動をより迅速に把握する工夫として、昨年秋からセンサー式自動捕獲システムの導入と、捕獲された情報を伝達する長距離無線通信システムを活用したニホンジカ捕獲試験の試行を開始しました。

同時に、罠（わな）付近に取り付けているセンサーカメラからの通信回線も整備しました。

捕獲情報が送信された際にはセンサーカメラの画像データも併せて確認でき、捕獲の有無に関係なく現地確認が必要とされている「罠（わな）の見回りにかかる時間と労力の削減」につなげることができました。



カメラから送られた画像と捕獲通報システムとの併用により、見回りの効率化を促進

また、GPS 首輪を装着したニホンジカの動きを確認する調査を行っています。

生息頭数が少ない環境下での越冬地の把握や、年間を通じての移動状況などを分析し、これまでに生息が無かった地域での行動の把握に努めています。

ニホンジカ行動把握調査
（衛星から位置情報を把握）

〇大型の猛禽（もうきん）類が舞う空と森

森林生態系の頂点に位置する大型の猛禽類（イヌワシ、クマタカ）は、全国的にみて、年々その数が減少していると言われています。

赤谷の森では、イヌワシ、クマタカが安心して暮らし、子育てができる環境の維持・形成を図っています。

人間の活動の影響を最小限とし、さらに、より望ましい生育環境を創造していくため、イヌワシ、クマタカがどのような森林でヒナを育て、どのような狩りをしているのか、その生活を地道なフィールド調査により解明しています。また、奥地の人工林を伐採して、イヌワシの狩り場を創出する取組なども行っています。

赤谷の森に棲むイヌワシ

〇森林環境教育の取組

当プロジェクトで行われている生物多様性の復元に向けた取組で得られた成果を活用しながら、「赤谷の森」を訪れた児童・生徒や一般の方を対象に環境教育を実施しています。

特に、地元の新治（にいはる）小学校の森林環境教育では、児童自らが疑問に思うことを事前にまとめて持ち込み、自ら気付いたことをグループの仲間同士で話し合う姿が見られました。

当センターでは、自然環境や歴史に触れ合う場の提供、ガイド役としてのサポートにより、子供達の心の豊かさを育む活動のお手伝いをしています。

新治小学校の児童を対象にした森林環境教育

放送大学面接授業
（2023 年 5 月 21 日開催）

小出俣にある「カツラの大木」

〇地域づくりへの協力

かつて、地域の人たちは、水源の森でもある「赤谷の森」の恵みを上手に利用してきました。山から流れ出る水脈は飲用していました。炭づくりの材料を採取していたブナやコナラの二次林の山中には、今でも炭焼き窯の痕跡が見られます。

しかし、時代の流れとともに、人と森林との関係が希薄となってきており、地域と森林との新たな関わり方を考えていく必要が出てきました。

このため、「赤谷プロジェクト地域協議会」が中心となり、地域の方々へ赤谷プロジェクトの活動内容や関連する情報を発信する場として「赤谷の森フォーラム」や「akaya café（赤谷カフェ）」などのイベントを開催しています。

その他、地域の水源や温泉源にもなっている森林を地域の方々に知ってもらうため、森の仕組みや自然環境などを学ぶ「自然観察会」の開催や、将来の地域産業に貢献すべく、成長が早く、家具材や木工品の材料としても重宝される「桐の植栽」を試行し、生育状況の検証なども行っています。

赤谷カフェによる座談会

三国街道での自然散策会

桐の植栽試験地の視察

5．プロジェクトサポーターによる活動

赤谷の森の玄関口には「いきもの村」と名付けられた当プロジェクトの活動拠点があります。昭和３０年代に建てられた苗畑（苗木育成施設）を関係者の手で復活させたもので、現在は当プロジェクトの調査研究・環境教育活動の拠点となっています。

この施設を活用した取組として、毎月はじめの週末に「赤谷の日」と名付けたボランティア活動を展開しています。群馬県内外から多くのサポーターが集い、三国山のニッコウキスゲをニホンジカの食害から守るためのシカ柵の引上げ作業や、クロサンショウウオやモリアオガエルなどの希少生物が生息する森林の環境変化のモニタリングなどに取り組んでいます。

赤谷の日サポーター活動（2023 年 5 月 13 日）
（左）三国山でのシカ柵上げ作業
（中）クロサンショウウオの卵塊調査
（右）モリアオガエルの卵塊調査

６．終わりに

最後に、時代の流れとともに歩み進んできた当プロジェクトも、今年度末の令和６年（2024 年）3 月 30 日に協定締結から 20 周年の節目を迎えます。

これまでに多くの方々からのご支援、ご協力を頂戴し、生物多様性の復元に向けた様々な取組を行ってまいりました。これまでの 20 年間をあらためて振り返るとともに、現在、その成果内容を取りまとめて発信していくための準備を進めています。

生物多様性の復元と持続的な地域づくりを目標としてきた当プロジェクトが、2017 年の「みなかみユネスコエコパークへの登録」にも寄与し、さらにネイチャーポジティブを目指して 2023 年に締結された「みなかみ町・三菱地所株式会社・日本自然保護協会による連携協定」にもつながる要因となりました。当プロジェクトの取組成果として、新たな足跡を残したものと考えます。

当プロジェクトの原点は、地域合意に軸足を置いた様々な活動を行う点にあり、地域に根付いた活動の積み重ねが、今般、様々なところで活かされたものと感じています。

地域住民、自然保護団体、国有林の管理者という立場の異なる三者が共に活動する全国的にも稀有な取組として産声を上げました。この活動が大きな節目を迎えるとともに、次の 10 年となる 2034 年に向けて更なる飛躍に進もうとしています。

これからも、自然と生物が共存しやすい環境づくりと、その恩恵による地域の暮らしの発展に寄与していけるよう、地元みなかみ町の皆さんをはじめ、当プロジェクトの取組に賛同いただける多くの皆様方と連携を図りながら進めてまいります。

引き続きのご理解・ご支援をよろしくお願いします。